八重地区協議会だより
# やえやま 6月号
2016年 No.141
発行：八重地区コミュニティ協議会 入来町浦之名4494番地2　電話・FAX：0996-44-4001

## ※　クリーン作戦実施　（空き缶拾い・カーブミラー磨き）　※

５月２２日（日）　コミュニティセンターに集合の後、空き缶拾いとカーブミラー磨きの班に分かれて、作業を実施しました。

年々、拾う缶の数は少なくなってきていますが、反面、山の奥の方に投げ捨ててある缶が目立ちました。車の中から遠くに向かって投げるのでしょうか。まとめて落ちているのをみると、袋に入れたまま、ポイ捨てしているようです。

カーブミラーや看板は、洗剤を使いブラシで一基づつ丁寧に洗っていただきました。カーブの多い八重ではミラーの数も多く、4台の動噴を使って手分けしての作業でしたが、見通しが良くなり、安全が保てます。お疲れさまでした。

# おいち風

昭和61年発行「入来の民話」より抜粋しました。

むかし、八重山（はえやま）に金五郎とおいちという若い夫婦が住んでいました。そのころの八重山には、入来のご領主の馬の放牧場がありましたので、金五郎はその牧場（まきば）の番人だったともいいますが、なにしろ広い八重山の中ですので、金五郎夫婦の家は人里離れた山の中の一軒家なのでした。

ある日のことでした。鹿児島から来たという一人の若い魚売りがおいちの家に来て、一夜の宿を乞いました。おいち夫婦はこころよく迎えて、その魚売りの若者から、鹿児島のめずらしい出来事や、うわさ話などを聞いて喜びました。

このことがあってから、その後、その魚売りの若者は、商いの行き帰りにおいちの家に泊まることが多くなりました。

おいちは金五郎の女房でしたが、嫁入って来てからまだ日も浅く、その上田舎にはまれに見る美しい女でしたので、魚売りの若者はおいちにすっかりほれこんでしまいました。魚売りの若者も、いなかの二才たちには見られないかっこいいところがありましたので、おいちもまたこの魚売りが好きになりました。そして二人はいつのまにか金五郎の目を盗むわりない仲になってしまいました。

金五郎は牧場の番人であったのに、時どき、そっと牧場の馬を盗んで、よそへ持って行って売り払ったりすることがあって、八重山の家を留守にすることが多かったそうです。ですから、おいちと魚売りとはそれを良いことにして、若い男女の歓楽にふけっていました。

そのうちに、いっそのこと、金五郎がいなくなってくれたら、二人だけでもっと楽しく暮らせるようになるだろう、おいちの家は、こんなに広い八重山の中の一軒家だから、誰にも気づかれる心配はない、二人で金五郎を殺してしまいましょう、と相談しあいました。

ある日の夕方、金五郎が二・三日ぶりに帰って来た時に、二人はしめしあわせて、金五郎にうんと焼酎を飲ませ、すっかり酔っぱらった金五郎が高いびきで眠ったところを殺すことにしました。

魚売りの若者は、魚籠を荷なう時に使う天秤棒を振りあげて、力いっぱいに金五郎の頭にたたきつけました。そばからおいちが、

「チ（乳）で打っちゃい。フテ（ひたい）（額）をチで打っちゃい。」

といいました。チ（乳）というのは天秤棒の両端に、荷綱がずり落ちないように打ちつけてある釘のことです。

そこで魚売りは金五郎の眉間に乳（チ）を打ちつけました。金五郎はぐったり死んでしまいました。

二人は金五郎の遺体を屋敷裏の唐芋つぼの中に埋めました。

あくる朝、唐芋つぼをたしかめに行った二人はぎょうてんしました。そこには新しい竹筒が立てられ、榊花が供えられてあったからです。

だれかが金五郎のお墓に花をあげたことがわかりましたので、二人はびっくりして、すぐさま掘りかえして、遺体をずっと山の中の炭がまの中に埋めなおしました。

「ここなら人の通り道ではないから、だれにもわかる気づかいはない。」

と、二人は話し合いながら帰りましたが、次の朝になると、

「念のため見て来よう。」

と二人で炭がまの所へ行きました。

「や、や、や、や。」

と二人はまっさおになりました。またその炭がまの前には花立が立ち、榊花をあげてあったからです。

そこで二人はまた遺体を掘り出して、もっと山奥に埋めなおしました。

だれにも見られずに二人だけでやるのですから、わかるはずはないのですが、ふしぎなことに、そこにもまた新しい榊花が供えられていました。

こうして二人が人を殺したということが、とうとうご領主の耳に入りました。おいちは役人たちに捕らえられて、お仕置場へ送られることになりました。

そのころの決まりで、人を殺した大罪人は村中引き廻しの上、はりつけにして殺す、ということに決まっていましたので、罪人係の役人はおいちを後手にしばりあげ、裸馬に乗せて村中を引き廻しました。

ちょうど中野の原まで下りて来た時でした。おいちが役人に申しました。

「お役人様、わたしはもうすぐ死ぬのですから、この世の思い出に、わたしに歌を歌わせてくださいませんか、わたしは歌が大好きでございます。」

役人は死刑に決まった大罪人の願いごとを、自分一人だけの判断で許すということはできないことですが、歌ぐらいならかまわないだろう、といって、おいちの願いを許しました。

おいちは嫁入る前から美人娘で評判だったばかりでなく、声もまたきれいで、歌がとても上手な娘でした。

おいち引き廻しの様子を見ようと、道ばたに集まった人びとは、たぐいまれな美しい娘が、黒髪を風になびかせながら、銀鈴のような美しい声でうたう歌声に、すっかり聞きほれてしまいました。こんな美女が人を殺したなどということは、とても信じられない、と思う人が多かったということです。

おいちは出水口の仕置場で、はりつけのお仕置きをうけました。

◇

それから後のことです。

毎年おいちの殺された九月九日になりますと、村中をなまあたたかい変な風が吹き抜けるようになりました。

その風に当たった人は、急に体がぶるぶるふるえて、高い熱を出して苦しみました。このようなふしぎな熱病にかかる人が年どしにふえて来ましたので、この風を「おいち風」と呼ぶようになって、村人たちはとてもこわがりました。そして

「あの人は風に遭（え）やったげな。」

ということだけでも、おいち風に遭って、熱病に臥せっていることを意味するようになったのでした。

（話　古老たち）（文　本田親虎）

**４月２８日（木）　防犯パトロール隊員の皆さんが地区内の合同パトロールを実施されました。ご苦労さまでした。今年度もよろしくお願い致します。**

## ※　第１回地区清掃作業について　（お知らせ）　※

環境地域づくり部会からのお知らせです。下記日程でコミセン周辺の清掃作業を計画いたしております。農繁期に入り、お忙しい事と思いますが、皆様のご協力をお願いいたします。

日時　　６月５日（日）　　午前８時から

場所　　八重コミュニティセンター

※　くれぐれも事故の無いように作業を行ってください。